

令和３年度 京都府立綾部高等学校（本校全日制） 学校経営計画（スクールマネジメントプラン） （実施段階）

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
・学力の向上と希望進路の実現 ・基本的生活習慣の確立 ・基本的人権を尊重する態度と豊かな人間性の育成 ・健康及び体力の維持・向上 ・地域社会から信頼される学校づくりの推進	（成果） ◇新型コロナウイルス感染症拡大のため年度当初に臨時休業を余儀なくされたが、府立高校特色事業やスマートスクール事業等を連動させ、ICT環境の整備とその活用を拡大し、新しい学び・指導に挑戦することができた。 ◇探究活動については、「フロンティア学」では臨時休業による計画の乱れはあったが、一定系統的な指導を行うことができた。特に綾部市議会主催の高校生議会で研究成果を発表できたことや台湾の高校生と交流したことが生徒の自信につながった。 ◇コロナ禍で制限のある中ではあったが、総務企画部を中心とした学校公開等の広報活動、開放型地域スポーツクラブ、ボランティア活動での協力等の広報・連携を行うことができた。PTAと連携した活動も、昨年度と比較すると縮小されたが一定取組を行うことができた。これらにより、本校志望者増につながった。 ◇進路指導においては、四年制国公立大学合格者が５名となった。また、学校斡旋による就職内定率も100%となった。さらに公務員では京都府職に１名、綾部市職に１名が合格した。 ◇部活動においては、体育系では全国高等学校総合体育大会代替大会で陸上競技男子ハンマー投げ６位入賞、男子ソフトボール部が選抜大会出場を果たした。文化系では書道部門・吟詠剣詩舞部門がWeb形式ではあったものの全国高等学校総合文化祭への出展を果たした。 （課題） ◆教育活動に関するアンケートでは２年連続でややプラスの結果だったが、目標とする結果にはならなかった。学力向上のため、授業の効率化や学習支援アプリ等も含めたICT環境の活用の研究を一層進めなければならない。特に令和４年度から導入されるBYOD(全員が端末を購入)に向けた準備を進めなければならない。 ◆探究活動のさらなる体系化と大学や地域と連携した内容を充実させること重要である。成果のあった活動の手法を応用したり、ポートフォリオとして体系的にまとめ、希望進路実現につなげる方法も確立していく必要がある。 ◆広報活動の充実により志願者のさらなる増加を目指さなければならない。また、広報だけでなく在校生、家庭への情報発信もタイムリーに行っていかなければならない。 ◆４Ｓ運動をベースとして、あいさつの励行、携帯電話・スマホの利用マナー、登下校の通学マナー、自転車の乗車マナーの向上など生徒の規範意識を向上を図り、シティズンシップ教育を継続し、充実させていかなければならない。 ◆緊急事態宣言期間もあったため時間外勤務時間の削減につながったが、あくまでも外的要因であり、引き続き業務の見直し、ノー残業デーの実施など業務のスリム化と時間外勤務時間の削減を進めていかなければならない。 ◆コロナ禍で様々な教育活動が制限されたが、次年度も新しい生活様式をベースとして、生徒が抱えているストレスにも配慮しながら、どのように活動していくかを見極めながら教育活動を進めていかなければならない。	■A・G・P(Ayabe Global Program)の推進 ＜スマートスクール＞ ・ICTを活用した授業 ・BYODを活用した授業 ・Slackの活用(ペーパーレス化・会議レス化) ・スタディサブリの活用 ＜探究活動＞ ・思考力・判断力・表現力の育成 ・海外高校生との交流 ・フロンティア学の推進 ・探究の時間の推進 ・わいがやルームの活用 ・SDGsを授業や部活動へ ＜地域発信＞ ・あすれつつあやべの推進 ・アンネのバラ園を拡充 ・西町アンテナショップでの販売 ・綾高ブランドの開発 ・地域での部活動 ・地域でのボランティア活動 ＜連携事業＞ ・京都先端科学大学 ・北部産業創造センター(京都工芸繊維大学) ・同志社大学 ・小中学校への出前授業 ・農業体験授業 ■3Q・4S+S(スマイル)の推進 3Q ＜Quality Teacher＞ 教師としての資質向上 ＜Quality School＞ 教育内容の充実 ＜Quality Students＞ 未来を切り拓く人材の育成 4S+S(スマイル) ＜整理＞＜整頓＞＜清潔＞＜作法＞＋＜スマイル＞ 整理整頓を心がけ、清潔な職場・学習環境を整える TPOに応じた言動を心がける 明るく元気に、笑顔がある学校

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価			成 果 と 課 題
1 組 織 ・ 運 営	教育活動の質の向上と魅力ある学校づくり	ICTを活用した授業の研究と充実、探究活動の充実、連携事業の充実を中心に教育活動の質の向上を図る。	A	B	B	◆教務部によるタブレット活用研修会のおかげもあり、ICTの活用は昨年度以上に進んだ。生徒の授業に対する満足度も93%と高かった。ただし、全員が十分に活用できているわけではないので、BYODが始まる次年度はさらに教職員間で研究を進めたい。 ◆生徒の授業に対する満足度は高い一方で、学力の向上を実感している割合は、生徒81%、保護者66%となった。昨年度より生徒は6%アップ、保護者は横ばいという結果であり、特に家庭学習習慣を中心に継続して取り組まなければならない。
		教育活動に関するアンケートの「学力が向上していると思う(そう思う・どちらかと言えばそう思う)」の合計が生徒・保護者ともに75%以上を目指す。	B			
	組織的な学校運営と業務のスリム化	分掌、教科、各種会議のスムーズな連携を図り、組織的かつ効率的な学校運営を推し進める。	B	B	B	◆学習指導会議をはじめ新学習指導要領が完全施行される次年度に向けた準備を進めることができた。 ◆衛生委員会での職場安全点検では前年度よりもよい評価をいただいた。会議や連絡事項についても可能な限りペーパーレス化を進め、効率化を図った。今後教員分のタブレットが整備されれば更なる効率化を進めることができる。 ◆1月までの平均時間外勤務時間は33時間で、目標は達成できた。
		整理・整頓に加え、ペーパーレス化、会議レス化を進め、環境・業務改善を推進する。また、平均時間外勤務時間についても45時間以下とする。	B			

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価			成 果 と 課 題
2 総 務 企 画 部	広報活動の充実	様々な広報媒体を有効活用し、中学生へ積極的に情報を発信する。	A	B	B	◆広報誌の他に動画を複数制作し情報を発信した。また、YouTubeチャンネルを開設し、WEBで動画を配信した。しかし、年間を通して活用しきれていない。 ◆広報物印刷を外注することで質を上げた。 ◆広報物の誤植があったので、チェック体制を強化する。 ◆在校生参加企画で説明会を実施できたが、志願者数の増加につなげられなかった。
		本校の認知度を上げて理解を促進させる広報物へグレードアップする。	B			
		学校説明会等で在校生が参加する企画を充実させ、中学生の進路選択へつなげる。	C			
	人権教育の推進	各学年での人権学習を中心に、人権教育の観点を持って全ての教育活動が行われるように啓発する。	A	B	B	◆全学年で新型コロナウイルス感染症等に対する差別や偏見の防止のための学習を動画視聴やワークシートを用いて実施した。 ◆年度当初の計画どおり、保健部等と連携して人権意識向上のため、人権学習を行った。
		人権意識を啓発する新たな取組を行うことで生徒や教員の人権意識の向上を図る。	B			
	PTA活動の支援	PTA活動により多くの会員が参加できるよう、本部役員会との連携をさらに深める。	B	B	B	◆コロナの影響により、PTA活動自体があまり開催できなかったが、本部役員会との連携を深め、土曜日のまなび庵の開放など新たな取り組みを行った。 ◆広報誌は年3回発行し、写真を多めにするなど広報委員会での意見を取り入れ、より良い広報誌作成に努めた。
		PTA広報誌の作成がより円滑に進むよう、協力体制を強化する。	A			

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価		成 果 と 課 題	
3 教 務 部	教育課程の編成	生徒や保護者のニーズに応じた特色ある教育課程の編成を行う。	B	B	◆学習指導会議を複数回行い、各教科の意見を教育課程に取り入れることができた。 ◆学年と連携し、1年生については、クラスごとに科目選択の説明を丁寧に行った。	
		生徒が希望進路に合わせた科目選択ができるように、各教科・担任と連携する。	A			
	基礎学力の向上・主体的な学び	全教職員がロイロノートを活用した授業を行うための準備をする。	A	A	B	◆ICTについて複数回の研修や案内を行った。一部の先生方は使うようになってきたが、全員の先生が使えるようにはなっていない。 ◆観点別評価などについて学習指導会議を定期的に行い、教科の連携を図った。
		教科主任を通じて、指導方法・評価の改善や学習形態の工夫をするように徹底する。	A			
	探究活動の充実	SDGsを取り入れた探究活動を充実させる。	A	B	◆福知山公立大学の谷口教授のアドバイスを 受けて、より深くの探究活動を行えた。 ◆調べ学習で終わらないようによりよい探究活 動にするのが課題である。	
		探究活動を通じて、主体的に学ぶ力をつける。	B			

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価			成 果 と 課 題	
4 生徒指導部	安心して学べる学校作りを目指す	いじめや暴力をなくす指導を行い、命の大切さを伝える。	C	B	◆暴力事象が1件と私物の器物破損などがあり、人間関係の構築等について指導が必要である。 ◆授業中の携帯端末の指導は昨年よりも減少したが、繰り返し指導が必要な生徒がいた。(延べ33人) ◆盗難が12月に一部の部活動で起こってしまった。全体的にそれぞれの管理意識の改善も必要である。		
		授業を大切にし、学力の向上をめざすためにも、携帯電話利用のマナーやモラルの向上を目指す。(授業中の不正使用年間30件以内)	B				
		盗難未然に防止のため、校内巡視をすると共に、各自の貴重品等の管理意識を向上させる。(発生件数年間0件)	B				
	シティズンシップ教育を推進する	生徒会を中心に学校行事等を主体的に企画・運営させる。	B	B		◆もっと生徒会中心の学校祭ができれば良いが、コロナ禍の中では危機対応も必要になってくるので難しい面もある。 ◆登下校時の自転車マナー等のご指摘が一番多く、指導の足りなさを痛感した。 ◆学期に1度のボランティア清掃については、計画的に行うことができ、地域の方との交流もできたのではないかなと思う。また、生徒自ら通学路でゴミが散乱していたのを片付けたり、困っておられた方の手伝いをして褒められるなど、嬉しい連絡もあった。	
		登下校時の通学マナーや自転車マナーの向上を目指す。	B				
		コロナ対策を万全にし、ボランティア活動に積極的に参加し、地域社会とのかかわりを深める。	B				
	基本的生活習慣を確立する	常に身だしなみを整えるように、教職員全体で日常的な指導を徹底する。(身だしなみスランブラリーの実施)	B	B			◆身だしなみ指導では、同じ生徒が何度もくり返し指導を受ける状況で、指導内容を変えても十分に改善されなかった。 ◆遅刻も同じ生徒が繰り返し指導を受ける状況であった。(合計12人) ◆朝の挨拶については多くの生徒ができるようになってきた。さらに、正しい言葉遣いを指導していきたい。 ◆月に1回の「生徒指導だより」を発行し、基本的生活習慣の大切さを訴えた。
		入室許可証システムと遅刻スタンプラリーを実施し、学校と家庭が連携して指導する。(朝の遅刻5回以上学期3名以内)	B				
		挨拶の励行や入室マナー、正しい言葉遣いを身に付けるように指導する。	A				

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価		成 果 と 課 題
5 進 路 指 導 部	希望進路の実現に向けた確かな学力の育成	長期休業中に実施する特別進学講座の有効的活用を図り、また、模試データの分析とその活用を充実させ、個々の生徒の学習課題の解決を図る。	B	B	◆昨年は実施できなかった3回の進学特別講座を実施することができた。 ◆模擬面接をはじめ、多くの先生で個別指導を行うことができ、就職指導が充実したものとなった。
		各生徒の希望進路の実現を果たし、卒業後の進路未決定を0とする。	A		
		適切な資料を、適切なタイミングで提供できるよう、資料の整理整頓を心がけ、習慣化する。	B		
	学年部、教科と連携した組織的進路指導の展開	担任との情報交換を密に行い、生徒の進路決定に必要な情報を積極的に共有する。	B	B	◆学年部をはじめ、他分掌との情報共有や連携が不十分であった。 ◆スタディサプリの活用は、教科や学年部と連携を図り充実させていく必要がある。また、問題点や要望も吸い上げ、リクルートに改善を求め利用しやすい環境づくりが課題である。
		模試分析の資料や入試過去問題の積極的活用を図り、充実した教科指導のための環境整備を図る。	C		
		スタディサプリを活用し、学習の個別最適化を図る。	B		
	生徒自身の主体的進路選択の支援体制確立	3年間を見通した系統的なキャリア教育の充実を図る。特に低学年での系統的な指導を充実させる。	B	B	◆キャリアパスポートの取組について、教科や学年部と連携を図り充実させていく必要がある。また、ポートフォリオなども有効に活用していくことで、主体的に生徒が取り組めるように努めていきたい。
		ポートフォリオの活用や模擬試験の解き直しを通して、生徒自身が主体的に課題解決に向けて学習に取り組む体制を作る。	C		

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価		成 果 と 課 題
	3Q・4S+Sの推進	SKD(掃除きれいにできる)活動を充実させる等、環境美化に関する意識の向上を図り、校内の環境美化を推進する。 【評価基準】清掃に関するアンケートにおいて肯定的な回答の割合 A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	A	B	◆SKD活動を2回実施し、校内美化意識の向上を図ることができた。掃除のアンケートでは肯定的な意見が87%であった。ただし、掃除不十分な箇所も数カ所あった。 ◆保健委員と環境美化委員の活動については、黙食キャンペーンとSKD活動を行った。今年度の黙食キャンペーンは新たな取組である。 ◆各学年1回ずつ保健学習を行った。いずれの学習についても、感想やアンケートの内容は良好で「新たな知見を得た」「自分の考えや行動を改めたい」というものがほとんどであった。 ◆適応指導会議を現在までで10回行い、適宜、学年部と連携し、気になる生徒に対応した。大きな課題を抱えている生徒については、ケース会議や教科担当者会議を開き、指導方法の検討や情報の共有を図った。
		保健委員と美化委員の活動をより活発にし、生徒の健康面や校内美化の面で向上を図る。 【評価基準】保健委員と環境美化委員による新たな取組の合計 A 3つ B 2つ C 1つ D なし	C		
		各学年で実施する保健学習により、生徒の心身に関する啓発を行い、その向上を図る。 【評価基準】保健学習アンケートにおいて肯定的な意見の割合 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	A		
		学年部や教科担当との連携を密にし、気になる生徒をもれなく把握し、進級のための支援を行う。 【評価基準】学校適応指導会議対象生徒と気になる生徒の成績不振科目数 A 2つ以下 B 4つ以下 C 6つ以下 D 7つ以上	C		

6 保健部	健康及び体力の維持・向上	健康に関する日々の啓発活動を推進し、保健室来室生徒の数を減らす。 【評価基準】保健室来室生徒数(年間延べ人数) A 750人以下 B 800人以下 C 850人以下 D 851人以上	A	C	B	◆1月末で保健室来室生徒数は601人で昨年度と比べて大幅に減少した。感染症予防に関する日常の指導等により、健康に関する意識が向上したと考える。 ◆感染の恐れから、強く受診指導を行うことができず、結果として、受診した生徒の数は約60%程度となった。 ◆12月の健康観察未入力生徒の平均は54.6人であった。多くの先生方の協力を得て昨年度に比べ減少したが、感染の長期化の中で危機感が徐々に薄れた点があった。 ◆感染症に感染した生徒の数は、2月14日現在で11名であった。内訳は全て新型コロナウイルス感染症である。マスクの着用等、新型コロナウイルス感染症に対する予防が他の感染症予防にもつながったことと、全教職員により日常的に感染予防についての注意・指導を行う中、感染症に対する意識もかなり向上したと考える。これらの活動が、校内でクラスターが発生しなかったことにつながったと考える。
		健康診断の結果、受診が必要な生徒について受診するよう指導を徹底する。 【評価基準】受診した生徒の割合 A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満	D			
		朝の健康観察実施の指導を徹底し、健康観察入力できていない生徒の数を減らす。 【評価基準】健康観察未入力生徒数(12月の平均人数) A 40人以下 B 50人以下 C 60人以下 D 61人以上	C			
		感染予防に関する効果的な注意喚起や啓発活動を行い、生徒がインフルエンザ等の感染症に感染することを未然に防ぐ。 【評価基準】年間感染症感染者延べ人数 A 15人以下 B 20人以下 C 30人以下 D 31人以上	A			
	組織的な学校運営と業務のスリム化	保健部の活動内容をそれぞれ再検討し、より合理的で質の高い活動が行えるようにする。 【評価基準】年度末の保健部会で判断 A 合理的で質の高い活動を十分行うことができた B " 行うことができた C " あまり行うことができなかった D 昨年度と同じあるいは昨年度以下の活動であった	A	A		◆昨年度並みということをしてできるだけ排し、保健部の活動について常に改善を図り、新たな取組や方法を模索・実行することができた。

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価		成 果 と 課 題
	学習習慣の確立と基礎学力の定着	学ぶことの大切さを認識させ、ベル着を徹底し、授業にしっかりと臨む態度を育てる。	B	B	◆日々の声掛けにより、ベル着を習慣化することができた。今後は授業準備もしっかりさせ、授業時間を大切にする態度を一層育みたい。 ◆考查ごとに「生活・学習チェックアンケート」を実施し生徒の実態把握に努めたが、家庭学習の習慣が定着したとは言いがたい。進級を機に意識を高めさせたい。 ◆各担任が必要に応じてこまめに面談を行うことで、生徒に寄り添う、個に応じた指導ができた。
		学習内容の定着を図るため、1日2時間以上の家庭学習の時間を確保させ、学習習慣を確立させる。	C		
		教科担任と連携を密にするとともに、面談をこまめに行い、個に応じた指導を行う。	B		

7 第1学年部	基本的生活習慣の確立と規範意識の育成	学校生活を円滑に送るため、生活規範となる校則などを尊重する態度を育成する。	B	B	B	◆生徒指導部と連携して身だしなみ等の校則を順守する意識の定着を図り、一定の成果を収めることができた。 ◆日々の挨拶・清掃等を通じて、社会人として必要な「作法」を身に付けさせる指導に努め、成果を上げた。今後も「スマイル」溢れる生活になるよう支援していきたい。 ◆必要に応じて保護者と連携し、生徒の情報共有を行うことで信頼関係の構築に努めた。各分掌との連携も密にし、各行事を円滑に行うことができた。
		4S+S運動に基づき、挨拶や身だしなみなどのマナー指導を徹底し、教室の環境美化を図る。	B			
		保護者との連絡を密に行い、生徒の情報共有を行うとともに、関係分掌との連携を図る。	B			
	豊かな人間性及び協働する態度の育成	綾高祭や学年行事等に主体的・積極的に取り組みせ、仲間との信頼関係を深めさせる。	B	B	B	◆コロナ禍により行事が縮小される中で、一つ一つの取組を大切にクラスメイトとの信頼関係を築くことができた。来年度以降は学年間でも関係を深められるように取り組みせたい。 ◆生徒達は各々友人関係等に悩みを抱えながらも乗り越えようとしているように見受けられる。今後も人とのつながりを大切にしよう指導したい。 ◆ボランティア等の特別活動については、行うこと自体難しい状況であった。今後も多くの人と関わる活動を勧めていきたい。
		学校生活の様々な集団活動の基本には人権の尊重があることを日々意識させ、取り組ませる。	B			
		部活動、ボランティア活動等への参加を勧め、多くの人と関わりの中で、人間的な成長を促す。	B			

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価			成 果 と 課 題
8 第2 学 年 部	基本的生活習慣を徹底させ、規範意識を高める	「4S+S」の視点に立ち、挨拶や身だしなみ、規則を遵守する指導を徹底し、学びに向かう「学習環境」をつくる。	B	B	◆身だしなみや学習環境を整えられるよう、終・始業式や定期考査、修学旅行等、節目節目では保護者や関係分掌と協力し、特に意識して指導をすることができた。 ◆各学期には学年集会を行い、規則を遵守する態度の涵養に努めた。しかし、十分な改善がなされたとはいえず、引き続き指導が必要である。 ◆携帯電話の不正使用については、同じ生徒が繰り返し指導を受ける場合が目立った。指導と合わせ、不正使用を抑止する環境づくりも課題である。	
		携帯電話等の違反利用者の根絶を目指し、「授業」を大切にする姿勢の徹底を図る。	C			
		保護者との連絡を密に行い、生徒の情報共有を行うと共に、関係分掌との連携を図る。	A			
	学習習慣を徹底させ、基礎学力を定着させる	チャイムと同時に授業を開始でき、授業にしっかりと臨ませる指導を徹底する。	B	A	B	◆個別の配慮を要する生徒について、教科担当者会議をはじめとする各種会議に諮りながら、適切な支援・指導を行うことができた。 ◆定期考査毎に目標設定や振り返りを行い学習習慣の定着を図った。 ◆学習面に課題のある生徒に対し、必要に応じて教科担当者や関係分掌と連携し、面談や指導を行い、授業態度の改善を促した。
		教科担任と連携を密にし、個に応じた指導を行う。	A			
		各コースの実態に即した指導等をふまえ、授業及び家庭学習時間の大切さを認識させる。	B			

自らの進路を意識させ、進路目標の達成に努める	担任面談を適切に実施し、進路意識を喚起し、希望進路達成の基盤をつくる。	A	B	◆担任面談を適切に実施し、進路希望の把握や達成に向けての支援を行うことができた。 ◆総合的な探究の時間や志望理由書サポート講座等を有効に活用し、進路選択に関する情報提供や生徒が自らの進路について考える機会を体系的に提供することができた。 ◆各種検定試験や模擬試験の受験を励行し、多くの生徒が受験をした。また、検定の合格率及び模擬試験の成績も向上した。模試結果を学年や教科担当者と共有し、授業改善に生かすなど、活用方法についてはさらに工夫が必要である。
	進路指導部や教務部と連携し、進路選択に関する情報提供を効果的に行う。	B		
	各種検定試験や模擬試験等の受験を推奨するとともに模試結果の活用を図る。	B		

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価		成 果 と 課 題
9 第3学年 部	希望進路の実現	希望進路の実現を目指し、生徒との信頼関係を深めるため、個々に応じた面談を重ねる。	A	A	◆進路についての個人面談を繰り返し実施することにより、生徒の進路希望を把握し指導を進めることができた。 ◆進路指導部と常に連携を図り、情報を共有しながら指導ができた。
		普通の授業を大切にし基礎学力を高め、それぞれに希望進路を100%達成させる。	B		
		進路指導部と連携を図り、各自の目標を達成するまで粘り強く努力させる。	A		
	規範意識の向上とリーダーシップの育成	就職、進学面接試験を意識し、常日頃から挨拶や正しい言葉遣いを常に意識させ身だしなみを整えさせる。	B	B	◆日常の基本的な生活習慣においては、ほぼ確立できた。 ◆学習環境を整える上で、一部の生徒がなかなか指導に乗らないことがあった。 ◆学校祭では、最上級生として手本となる活動ができ、成功に導くことができた。
		4S+S運動を推進し、机上や教室の整理整頓を徹底させ、皆が授業に集中できる学習環境と授業規律を確立させる。	B		
		皆と協力し合って楽しく充実した学校生活を送ろうとする態度を育てる。いろいろな生徒主体の取組で、積極的にリーダーシップをとらせる。	B		
	保護者との連携	家庭における学習習慣をはじめとして、基本的な生活習慣の確立(欠席・遅刻連絡を含む)のため保護者との連携を密にする。	A	A	◆常に保護者との連絡を密にして、生徒の基本的な生活習慣の確立や、進路について共有するように努めた。
		三者面談や家庭連絡、学級通信を通して、進路情報の提供等を行い、希望進路の実現に向けた連携を一層深める。	A		

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価		成 果 と 課 題
10 事務 部	適正な事務処理の遂行と教育の諸条件整備	短期経営目標に基づいた予算の計画的・効率的な執行を行う。	A	B	◆限られた予算の中で、工夫して計画的な予算執行に努めた。 ◆学校施設維持修繕を計画的に進めるとともに、故障箇所の修繕等の対応に努めた。 ◆窓口及び電話対応について、おおむね迅速・丁寧な対応を行うことができた。 ◆校内の整理・整頓に努めるなど、4S運動に取り組んだ。
		各分掌部長や教科主任と連携し、ICT・探究活動を取り入れた教育活動を推進する。	B		
	窓口業務及び電話対応における信頼される学校	保護者や来客者等に親切・迅速・丁寧な窓口対応を行う。	A	A	
		電話対応において、迅速な取り次ぎ、丁寧かつ的確な説明を行う。	B		
		来客者に来客者名簿を記入いただくことで来客者の行動を把握し、不審者対応を図る。	A		
	安心・安全・清潔な環境整備	4S(整理・整頓・清潔・作法)運動を基に、安全で清潔な教育環境の整備に努める。	A	A	

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価		成 果 と 課 題
1 国語科	学習習慣を確立させ、基礎学力の定着を図る。	計画的・継続的な小テストや課題への取組を通じて、家庭学習に主体的に取り組めるよう指導する。	A	B	◆授業はもとより、小テスト等においても学年ごとに連携し、計画的継続的に取り組むことができた。 ◆漢字検定については、ポートフォリオ作成の観点から、学年部とも連携し受検促進に努め、受検者はのべ302人になった。(前年度比10%増) 今後は合格率上昇を図るため、より有効な支援を考えていきたい。(2/18現在・第3回漢検合格判明は3月中旬の予定)
		基本的な語彙力の向上を目指し、日本漢字能力検定の受検を推奨し、合格率50%となるよう支援する。	B		
		学習規律を確立するとともに、切磋琢磨する学習環境づくりに取り組む。	B		
	個に応じた指導を進め、希望進路の実現を支援する。	模擬試験等の分析により、各コース、個人の実態の把握に努め、その特性に合わせた指導を行う。	B	B	◆希望進路の実現のため、また、キャリア教育の一環としても「小論文・志望理由書」対策は重要である。今後も学年部・進路指導部と連携し、各学年の課題に沿った取組を継続的に進め、国語力の向上を目指したい。 ◆全体的に学力を伸ばすことができたが、一部は、集中力・継続力を定着させることが引き続き課題であると、模試分析で明確になった。
		各クラス担任、進路指導部と連携し、小論文・志望理由書の作成等、表現に関わる取組の支援を行う。	B		
		「読書の時間」等、読書の取組を通じて、読解力、思考力の育成を目指す。	B		
	国語科全体の教科指導力の向上に努める。	外部機関での研修に参加し研鑽に励むとともに、指導方法等について積極的に意見交換し、指導力の伸長を目指す。	B	B	◆昨年度に続き、ICTを積極的に活用することができた。新型コロナウイルス感染症のために登校できない生徒のためのオンライン授業も工夫して実施することができた。 ◆「大学入学共通テスト」の新傾向問題に対して、教科内で指導法の研究までは十分には行えなかったが、教科内で協力し、今後も最善の取組に努めたい。
		「大学入学共通テスト」実施に向け、実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する方策の研究に努める。	C		
		効果的なICTの活用やアクティブラーニングの実践等について研究し、授業に生かす。	A		

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価		成 果 と 課 題
2 地歴・公民科	生徒の希望進路の実現に努める	生徒が主体的に取り組める効果的な課題を提供し、質の高い学力を育む。	B	A	◆生徒の状況に合わせ、教科としての指導だけでなく、面接・小論文などの個別指導を多く行うことができた。
		個に応じた指導を充実し、各種模擬試験や入学試験、公務員試験、入社試験等でしっかり結果を出せるよう努める。	A		
	教師の授業力を高める	最低年2回は全員公開授業を実施し、授業力の向上に努める。	C	B	◆授業時間割により、見学に行ける公開授業を行える機会がとれないところも多くあり、目標とする公開授業数までは行えなかった。
		各種模擬試験の結果を分析し、生徒たちの学習課題を把握し、授業改善に努める。	B		
	授業方法の改善に努める	新テスト、新学習指導要領における新科目についての研修を深め、対応力をつける。	B	B	◆模擬試験等を用い、新テストの傾向を各自で研究することはできたが、それに対応する授業を見出すことは難しかった。その中でも、各自でICTを用いた授業を行うことができたのは成果である。
		生徒の「思考力・判断力・表現力」を育成する授業の工夫、効果的なICTの活動について研修を深める。	A		

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価			成 果 と 課 題
3 数 学 科	学力の向上	基礎基本をしっかりと理解させ定着させる。そのために、小テストや復習などを効果的に行う。	A	B	B	◆講座の実態に応じて、小テストやプリントを配布して、学力の伸長を図った。 ◆模試において、偏差値50以上の生徒の割合を増やすことができた。
		模擬試験を活用して、大学入試における標準的な問題が解けるだけの学力の向上を図る	B			
		予習や復習をさせる。そのために、スタディサブリを効果的に活用したり、演習プリントを渡したりする。	B			
	教科指導力の向上	生徒が授業に能動的に参加できるように、授業展開やプリントを工夫したり、ICTを活用する。	A	B	B	◆学習する分野に応じて、グループワークやICTを効果的に活用して授業を展開することができた。 ◆来年度の1年生から全員がタブレットを持つことになるので、今年度以上にICTを有効活用して、生徒の学力伸長を図っていきたい。
		生徒の理解が少しでも深まるように、問題解説や問題演習を行う。	B			
		数学に対する苦手意識を克服させ、数学好きの生徒を増やす。	B			

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価			成 果 と 課 題
4 理 科	個々の生徒・コースに応じた指導の工夫	「主体的・対話的で深い学び」の観点から、各々の科目・総合的な探究の時間(フロンティア学)において、生徒の思考・判断を促す発問をし、年度末の授業評価アンケートにおいて、7割以上の肯定的な意見の獲得を目標とする。	B	B	B	◆科目によって偏りはあったが、生徒の思考・判断を促す発問を心掛け、実験・観察などを効果的に行うことで、個々の生徒・コースに応じた指導ができた。 ◆スタディサブリの課題配信機能やメッセージ機能を使い、宿題やプリントの配信を行ったが、更なる活用の余地がある。
		実験・観察や野外活動を積極的に実施し、各講座ごとに少なくとも学期に1回は実験・観察等の探究的に活動させる授業を行う。各科目の授業においてSDGsの観点を取り入れた指導を行う。	B			
		授業規律を確立し、スタディサブリの課題配信機能等を有効に利用することにより、個々の生徒に応じた指導を行う。	B			
	基礎学力の定着と希望進路の実現	各学年部・担任との連携を密にすることで各々の生徒・コースの学習状況を把握し、指導に活かし、教科の評定平均値3.5以上を目指す。	B	B	B	◆各々の生徒・コースの学習状況を把握したうえで、ICT機器を効果的に用い、学習プリント等を活用することにより、基礎学力を定着させることができた。 ◆授業において問題演習などを行ったが、模擬試験等へ向けた十分な対策を行うことができなかった。
		教科で学期ごとに12回以上、電子黒板・ICT機器を用いた授業を実施し、小テストや学習課題等を学期に1回以上実施する。	A			
		3年生秋の模擬試験において、受験者の理科偏差値50以上を目指す。	C			
	指導力の向上に努める	定期考査等において、観点別学習状況を把握する設問を出題し、評価に反映させる。	C	B	B	◆BYODに関する研修に積極的に参加して、ロイロノートの活用方法などを身に付けることができた。 ◆オンラインなどの研修を利用して、様々な研修に参加して教科指導力向上に努めた。 ◆観点別評価へ向けた取り組みが十分に実施できなかった。
		校外での研修に積極的に参加し、自己研鑽に努める。教科で年間合計4回以上の研修に参加する。BYODに関する研修を教科で年3回実施する。	B			
		公開授業や研究授業に、教科で12回以上参加し、教科指導力の向上を目指す。	B			

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価		成 果 と 課 題
5 保 健 体 育 科	質の高い授業を展開する	安全面に留意し、挨拶、集団行動、身だしなみ等、けじめのある授業を実施し、授業規律の確立を図る。	B	B	◆授業規律をしっかりと意識させ、けじめある授業が展開できた。 ◆常に時間を守ることを呼びかけたが、一部の生徒が遅刻を重ねる場合があった。 ◆全員でICTを授業に取り入れるよう努めた。
		時間を大切にすることを意識を持たせ、授業遅刻を年間でのべ10人までにする。	C		
		ICTの積極的な活用や、有意義な班活動の実施、ノートや課題の提出等、質の高い授業の展開を目指す。	B		
	生涯を通じて運動ができる資質や能力を育てる	運動量の確保に努め、体力及び運動技能を向上させる。	B	B	◆授業のウォーミングアップ等も運動量を増やし、体力の向上を図った。 ◆班ノートを用いて、ミーティングをさせることによって、グループみんなで目標や課題を共有させた。 ◆導入時にICT機器を用いて実際の映像を見せるなどして興味関心を高めた。
		班活動を通して、自主、協力、責任等の社会性を育てる。	B		
		運動への興味・関心・意欲を高め、生徒自ら積極的に活動させる。	B		
	健康・安全への関心を高め、日常生活の中で実践できる力を育む	自ら課題を見つけ、探求する能力及び行動力を育てる。	B	B	◆授業を通じて身近なところから、健康の大切さを自分自身のこととして考えさせるように心がけた。 ◆基本的生活習慣の大切さを理解させ、実施できるようにいろいろな場面で呼びかけた。
		健康の保持増進への知識や理解を深め、基本的生活習慣を身に付けさせる。	B		

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価		成 果 と 課 題
6 英 語 科	4技能5領域を統合した授業展開の工夫と研究	4技能5領域を統合した指導法や授業展開について、研究や実践を行うとともに、教材と指導案を共有する。	B	B	◆新学習指導要領の実施に向けて、評価の方法や観点について教科内で学習や協議の機会を持つことができた。 ◆綾部高校独自のルーブリックについて、年度当初と年度終わりに生徒に全体像を示し、習熟度を自己評価させた。また、科目によっては単元ごとに技能・習熟度の目標をルーブリックに照らして示し、生徒に意識させることができた。 ◆ルーブリックの一層の活用や、観点別評価に対応した学習活動と評価方法の確立などについて、積極的に研修の機会を設け、研鑽に励みたい。
		綾部高校独自のルーブリックを教員と生徒が共有し、目標設定や到達度の把握、そして評価の観点として活用する。	B		
		英語科全体で年間1人1回以上は学外の研修に参加し、入試動向や効果的な指導方法を学び、情報を共有する。	B		
	基礎学力の定着と応用力の伸長	小テストや週末課題を適切に実施し、基礎学力の定着と学習習慣の確立を図る。	A	A	◆小テストや週末課題を体系的に設定し、学習習慣の定着、学力の向上に寄与することができた。 ◆特別進学講習では習熟度講座を編成し、学習内容と到達目標を適切に設定して指導することができた。 ◆英検は3度の受験機会を確保し、受験を推奨した。今年度は延べ125人が受験し、1次試験には68人が合格した。(合格率54%) また、教科全員で2次試験の対策指導を行い、第2回までの合格率は100%であった。
		応用力伸長のために進学特別講習や習熟度講座を有効に活用する。	A		
		GTECや実用英語技能検定試験の受験機会を設け、受験を推奨するとともに、3年生1学期までに20%以上の生徒がCEFRのA2(高校中級)レベルの英語力を、5%以上の生徒がB1(高校上級)レベルの英語力を身につけられるように指導する。	B		
	英語を用いた情報処理能力と発信力の強化	1年生を中心に、各学期に1回はパフォーマンス課題に体系的に取り組み、英語を用いて自己表現する力を伸ばす。	A	A	◆1年・3年の授業においてAETとのTTを行い、プレゼンテーションやディベート等のパフォーマンステストを実施することができた。 ◆ICT機器を用いた教材の提示やオンラインによる課題配信や学習管理等、教科全体で進めることができた。さらなる活用に向けて、実践や成果を共有したい。
		4技能5領域の効果的な伸長を図るために、ICT機器や教材を有効に活用するとともに、成果の総括と授業改善を行う。	B		

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価			成 果 と 課 題
7 芸 術 科	基礎技術を充実させ自ら表現しようとする意欲を育てる	生徒一人ひとりの能力の掌握に努め、基礎的な内容から高度な内容まで表現できる幅を広げさせる。	B	B	B	◆基礎的な内容だけでなく、各自の能力に応じて発展的な表現ができるように、課題を工夫した。 ◆表現活動を通して得られた知識の獲得を適切に評価できるように、指導と評価の分析に注力する。
		感性に立脚した知識を獲得させ、試行錯誤して深められる機会を設定する。	B			
		授業時間を有効に活用し、授業規律を大切にする。	B			
	感性を磨き、生涯にわたって芸術を愛好する心情を育てる	鑑賞活動を通して生徒の興味・関心を高め、幅広い価値観を養う。	A	B	B	◆各課題の最後に発表する機会を設け、互いに鑑賞し評価ができた。 ◆グループの交流活動の機会を縮小したので、今後実施形態を工夫したい。
		発表の機会を多く持つことで表現する喜びを知り、感性を伸ばし生涯にわたって芸術を愛好する心情を養う。	B			
	指導力を向上する	双方向性のあるICT活用術について研究する。	A	A	A	◆音楽と美術で、生徒が1人1台iPadを使用した授業研究を進められた。 ◆ICTを活用した教材を積極的に導入し、生徒の興味・関心を鑑み授業改善を行った。
		生徒の興味・関心に鑑み、効果的な教材を選定し表現する楽しさを体験させる。	A			

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価			成 果 と 課 題
8 家 庭 科	家庭生活の改善・充実・向上を目指す	家庭生活の中から課題を見つけ出し、学んだことを実生活で生かせるような授業を展開する。	B	B	B	◆卒業後の進路やその先の将来を見据えた授業内容を展開することができた。 ◆知識だけで終わらないように、課題解決的な授業や家庭学習を取り入れることを検討していきたい。
		繰り返しの指導を行い、知識・技能の定着を図る。	B			
		卒業後の生活を見据えた学習を取り入れる。	A			
	自ら学ぶ意欲を育てる	実習を通して達成感や充実感を感じさせる工夫を行う。	C	B	B	◆一部の授業で実習の機会を十分に確保することができなかったが、ICTや様々な教材を用いて、実践的な内容の授業を行うように努めた。
		社会問題となっていることや生活課題を取り上げ、視野が広がるような授業を展開する。	B			
	指導力の向上	ICTを活用した授業の教材研究を行い授業に取り入れる。	A	B	B	◆ICT活用の幅を広げ、授業に生かすことができた。今後さらに生徒と教員の双方向における効果的な活用ができるように検討していきたい。
		社会や生活実態に応じた学習内容を検討する。	B			

分掌教科	項目(重点目標)	具 体 的 方 策 及 び 数 値 目 標	評価			成 果 と 課 題
9 情 報 科	基本的なICT機器の使用方法	キーボードによる入力を練習に力を入れる。文字数にして年度当初から10%の向上を目指す。	A	A	A	◆卒業後に困らない程度のキーボード入力のスキルは身についたと考える。 ◆文書作成、プレゼンなどの基本的な機能は使えるようになった。特に1年生は、表計算に時間をかけて取り組むことができた。
		文書作成、表計算、プレゼンのソフトウェアの使い方を指導する。	A			
	情報モラル意識の育成	個人情報の取り扱い方を通して、自己の個人情報について指導する。	B	B	B	◆具体的な例を用いて、個人情報や著作権について指導できた。 ◆知的財産権の重要性についての理解は難しく、今後の指導課題である。
		知的財産権(著作権・特許権など)の歴史を通して、その重要性を理解させる。	B			
		インターネットの安全な使い方、被害に遭わない使い方について指導する。	A			
	情報技術の活用	基本的なデジタル情報の仕組みについて理解させる。	A	B	B	◆理論的・抽象的な内容が多くなるため、数学等知識が不足している生徒にとっては難しく、指導の工夫が必要である。
		インターネットの仕組みについて理解させる。	B			

学校運営協議会 委員による評価	◆探究活動や課題学習の中で、地域の大学、事業所、市役所などと連携することで、生徒たちが貴重な体験を積み、気付かなかったことに気付いたり感じたりすることができた。そのことが生徒の成長につながっていると思われる。また、明るく元気に、伸び伸びと取り組む生徒の姿は印象的である。限られた教育課程の中ではあるが、できる限り「校外」で体験できる機会を増やし、学びの機会を増やしてほしい。さらに、地域の課題解決に取り組むなど、地域に根ざした取組で、地域全体を盛り上げてもらいたい。一方で、探究活動や課題学習は、その教育効果は高いが、指導する側の負担は大きい。急いで結果を求めようとせず、じっくりと地域と関わりながら、進めてもらいたい。なお、地域連携を進めていく上で円滑で効果的な取組を行うためにそのつなぎ役となるコーディネーターの存在も必要ではないかと思われる。 ◆次年度から導入されるBYODを見据えたICTの活用や研修の取組はよく進んでいると思われる。また、先生方も活用を進められている。今後もさらに推進してもらいたい。 ◆コロナ禍であっても可能な限り学校行事を実施されてこられたことは評価したい。学校行事は生徒が成長するよい機会であり、新型コロナウイルス感染症を正しく恐れ、行事を減らさずに取り組んでほしい。 ◆コロナ禍やICT活用の推進で、教職員・生徒ともに慣れてきたが、ストレスは高まってきていると思われる。ストレスの負荷が見えるようにすることも必要なことである。 ◆様々な魅力ある教育活動をされているが、それを地域住民に知ってもらう方法（広報）をより考える必要がある。高校の特徴をどのように出していくか、また育てていくかを考えていく必要がある。
次年度に向けた改善 の方向性	◆A.G.P (Ayabe Global Program) をベースとして、BYOD導入を迎える次年度には<スマートスクール>構想を実際に教育活動の中で有効活用・発展させていかなければならない。特に初めてのことであるため、全教職員で試行錯誤を重ね活用のノウハウを共有・蓄積していかなければならない。 ◆ICTを活用することで、学習効果を上げ、家庭学習などにおいて学習支援をおこなうことで、学力向上につなげる。 ◆探究活動は昨年度よりも体系的になり充実してきた。特に大学と連携によって大きく進歩したと言える。次年度も産学官との連携を深めることで、探究活動を本校の大きな特徴の一つとして育てる。 ◆様々な取組を地域住民（特に中学生）に知ってもらうため、戦略的な広報を展開していく。 ◆業務の整理・スリム化による働き方改革、学習環境や職場環境の改善を推進し、学校全体の環境改善を進める。 ◆コロナ禍は今後も継続することが予想されるため、正しく恐れ、正しく感染防止を行っていく。また、ストレスが強まると予想されることから、様々な教育活動を通じて、粘り強く学ぶ姿勢、道徳観などの育成を意識して取り組む。